

文学作品にみられる船場言葉と河内弁

—谷崎純一郎「細雪」今東光「悪名」より—

抄 録

船場言葉の丁寧な印象、河内弁の元気な印象について、その要因を見つけることを目的とした。小説から活用の法則、映画から話し方などを調査し、印象を創り出す要因を調べた。話す速度、口の開け方などが要因の一部であるということがわかった。船場言葉の丁寧な印象はゆっくりと相手に聞き取りやすく話すこと、河内弁の元気な印象は口を大きく開けるなど表情を豊かにすることで創られている。

キーワード：船場言葉，河内弁，文学作品

1.1 はじめに

明治時代につくられた標準語は、現在多くの人に浸透している。しかしながら、その反面、古くより培われた方言は少しずつ消えつつある。

大阪弁については他の地方の方言と比べると、研究対象となることが多いが、船場言葉、河内弁などと範囲を狭めていくと、研究量は大変少なくなる。先行研究をふまえ、比較的よくまとまっていると思われる彭（1993）の記述でも、大阪弁を摂津方言、和泉方言、河内方言の3つに分類することができる、とのみ述べ、その特徴はつかめていないようだった。また彭の研究で、話し言葉の調査方法は、100人前後を対象とした、アンケートのみであった。

がさつな印象を持たれることの多い大阪弁の中で、美しいと称される船場言葉について詳しく知りたいというのが、研究動機であったが、先行研究から調査するのは、大変困難に思われた。文学作品における、と範囲を絞った形にはなるが、本研究が消えつつある船場言葉や河内弁が後世に残るための、少しでも助力になれば幸いである。

1.2 研究目的

風間（2015）は、「これまでの日本語研究は書き言葉に偏っており、話し言葉の研究は遅れているきらいがある。」と述べているが、この風潮は大阪弁の研究においても、同様のことが言えるだろう。よって、書き言葉に偏らず、話し言葉の大阪弁について調べたい。

また、船場言葉の美しい印象、河内弁の元気な印象をつくる要因を調べ、話し方が与える印象を明らかにしたい。

2. 研究方法

小説『細雪』、『悪名』より、活用の法則を調べる。

『細雪』を選んだ理由は、船場言葉が使われていること、話し言葉も調査できるよう映画化されている作品であることの2点である。『悪名』を選んだ理由は、船場言葉と比較できるよう船場言葉と近い範囲で使用されている大阪弁を使用していること、『細雪』と同じく

映画化されていること、初出の年が細雪と離れすぎていないことである。

また、映画の同作品から、話す速度、話し方を調査し、船場言葉と河内弁を比較する。

2.1 研究対象

(1) 小説『細雪』 谷崎純一郎作

初出 1942年～1948年（『中央公論』掲載後、谷崎による自費出版）

美を最高の価値とする耽美派の代表、谷崎による長編小説。上巻、中巻、下巻にわかれ、船場の商家に生まれた四人姉妹の生き様をえがかれている。（解説より引用）

(2) 小説『悪名』 今東光作

初出 1960年（『週刊朝日』）

今東光の代表作の一つで週刊朝日に連載された作品。河内生まれの度胸と男気がある主人公朝吉が故郷を10代で飛び出して小さいながらも親分として一家をなすまでが描かれている。（新潮社文庫版の解説より引用）

(3) 映画『細雪』 東宝製作

公開年 1983年

監督 市川崑

(4) 映画『悪名』 大映製作

公開年 1961年

監督 田中徳三

2.2.1 研究方法（活用の法則）

船場言葉、河内弁の活用の法則を調べる。

細雪（上巻・中巻・下巻）、悪名の会話文で大阪弁であるもの（標準語でないもの）を堀井（1996）の大阪ことば辞典、例解新解国語辞典（第八版）を活用しながら、標準語に訳す。訳したものから活用の法則をまとめる。

2.2.2 研究方法（話す速度）

船場言葉、河内弁の話す速度を調べる。

映画『細雪』よりシーン1（0：07：04～0：08：03）、シーン2（0：34：09～0：35：08）、シーン3（1：48：42～1：49：41）と映画『悪名』よりシーン1（0：21：39～0：22：38）、シーン2（0：43：24～0：44：23）、シーン3（1：17：52～1：18：51）の登場人物全員の会話を原稿用紙に漢字仮名交じり文で書き起こす。文字数を話す速度の目安、映画ごとの平均もとる。

2.2.3 研究方法（発音、口の開け方）

細かい話し方について調べる。発音、口の開け方に注意しながら、映画を視る。

2.3 分析方法

船場言葉、河内弁を活用の法則、話す速度、発音、口の開け方の項目でまとめ、比較考察する。比較の結果から、船場言葉、河内弁の特色を考察する。そこから、話し方によっ

て与える印象の変化を分析する。

3.1 結果（活用の法則）

特徴をつかみやすい活用の法則は、表1に記載する。

表1 特徴的な活用の法則と言葉

	『細雪』	『悪名』
否定	文末に「ごわへん」(19回) 「ひん」(29回)「ん」(64回)	文末に「いん」(78回) 「ん」(52回)「へん」(43回)
断定	文末に「どす」(62回)	文末に「だす」(27回)「おあす」
尊敬	文末に「やはる」(132回) 「なさる」(87回) 「お…やす」または、てや尊敬	文末に「なはる」(21回) 「はる」(94回)
順接の接続詞	「よってに」(89回) 「やから」(24回)	「よってに」(11回) 「やから」(27回)
他	「…ではないか」→「…やんか」 二人称 あんさん	「…ではないか」→「…やんけ」 二人称 われ、わら、おのれ

順接の接続詞をみると、「やから」の使用回数は『細雪』と『悪名』で大差がない。しかしながら、「よってに」は『細雪』での使用回数が圧倒的に多い。否定の意味を付加する「ごわへん」「ひん」も同様である。

『悪名』で使用されていた二人称、「わら」は「われは」が省略されていった結果と考えられている。

3.2 結果（話す速度）

2.2.2の結果は、表2のとおりである。日本語における（アナウンサーたちの）、同調査法での話す速度の平均は300文字である。

表2 漢字仮名交じり文での一分間のセリフの文字数

	『細雪』	『悪名』
シーン1	308文字	324文字
シーン2	289文字	356文字
シーン3	283文字	371文字
平均	293.3文字	350.3文字

3.3 結果（発音、口の開け方）

映画『細雪』で、四女の話す速度が速い、次女からS音が多く聞こえるなど、登場人物によっても、話し方に違いがあったため、複数人に共通していることのみ記載する。

「…やろか」の文末部分のみ少しゆっくりになることや、「…る」の部分にS音、H音が入るなど、興味深い結果が得られた。

映画『悪名』は話す速度が速く、かつ全体的に滑舌が悪く聞こえるので、不明な言葉が多くあった。その点は、大阪ことば辞典と照らし合わせ、書体化した。このことから、3.2の映画悪名からのセリフ数は、聞き手によって、結果が変動する恐れがある。

まとめたものが、表3になる。

表3 発音や口の開け方の違い

	『細雪』	『悪名』
発音	無声音が多い 子音を落とさずに話す	[d] [r] [z] の多用、混同 母音を中心に話す
開け方	顔の下半分のみで話しているように 見受けられる、口内で舌が動く	上顎は上に空いた状態のまま、下顎 と舌がよく動く

4.1 考察（活用の法則より）

船場言葉は、「お…やす」「ご…なはる」などの例より、文頭に冠詞をつけ、かつ文末表現も合わせることで、尊敬の意味を付加することが多いと考えられる。「どす」や「お…やす」など、京ことばに似ている点が多い。船場の商人たちが、京にあこがれ真似した、京都の娘が多く船場に嫁いできたなど様々な理由が考えられている（堀井，1996，p.76）。「てや敬語」などの播磨の方言に類似した活用について、資料が少ないため断定はできないが、播磨と船場の人々の交流を示す重要な調査結果であると考えられる。

河内弁は、「いん」「やんけ」などの言葉が、和泉方言に似ている。このことより、河内弁は一般的な大阪弁と大差ないと考えることができる。

二人称の結果は、興味深いものである。船場言葉「あんさん」はおそらく、あなた様の変化形であろう。対して、河内弁の「われ」や「おのれ」は標準語では一人称で使用される。敬語は相手と距離をとる際にも使用されるというが、この結果は船場の人、河内の人との相手との心の距離感の違いの表れではないかと思われる。

4.2 考察（話す速度の結果より）

『細雪』293文字、『悪名』350文字と、明らかに『悪名』の方が速く話している。

『細雪』は、基本の速度とほとんど変わらないが、大阪弁は他の方言より早く話す（彭，1998，p.14）とされているため、大阪弁の中ではゆっくりと話す言葉と考えられる。

3.3でも触れたが、『悪名』での話す速度は聞き手によって変化するおそれがある。それでも、河内弁は速く話す方言であるといえるだろう。

4.3 考察（発音、口の開け方より）

船場言葉は無声音が、悪名は濁音が多い。また、船場言葉が子音を中心に、悪名は母音を中心に話していることは、口を大きく開けるかのどうかなどの、口の開け方にも影響しているであろう。

また、悪名で、滑舌が悪く聞こえる主な原因は、濁音の使用が多いことが原因であろう。また、母音を中心に口をあまり動かさない話し方をしていることも、要因の一つと考えられる。

4.4 考察（船場言葉、河内弁の比較）

4.1より、船場言葉が、大阪弁の中で異質のものであることは明白である。3.1で触れた「よってに」だが、悪名にも数件使用例が見られた。「よってに」は大阪全域で使われて

いるが、主に船場言葉で使用されていると考えられるだろう。

船場言葉は子音の省略をせず、冠詞などを文につけて話すため、標準語が同じ文章でも、河内弁より言葉数が多くなる。よって話す速度が遅くなり、その分聞き取りがしやすくなって、丁寧な印象がうまれるのだろう。また、京言葉に似ているということに、聞き手が無意識にでも気づいた場合、京ことばのやさしい、やわらかいといった印象も付加される。そのようなことも、印象を創りだす要因になっていると、考えられる。

なお、美しいといった印象は無声音の多用による部分が多いと考えられる。

逆に河内弁は、子音をおとし、母音を中心に話す。そのため、口が開いた状態のまま話すことになり、表情がうまれる。よって明るい、元気な印象を創るのだろう。また、[d][z]などの濁音の多用や話す速度が速いため、聞き取りにくいこと、全体的に声が大ききこともあり、乱暴な印象を与えるのであろう。

4.5 考察

船場言葉と河内弁の印象を創りだす要因より、丁寧な印象と乱雑な印象は対比の関係にあり、印象を創りだす要因も対比していると考えられる。これを図1にまとめる。

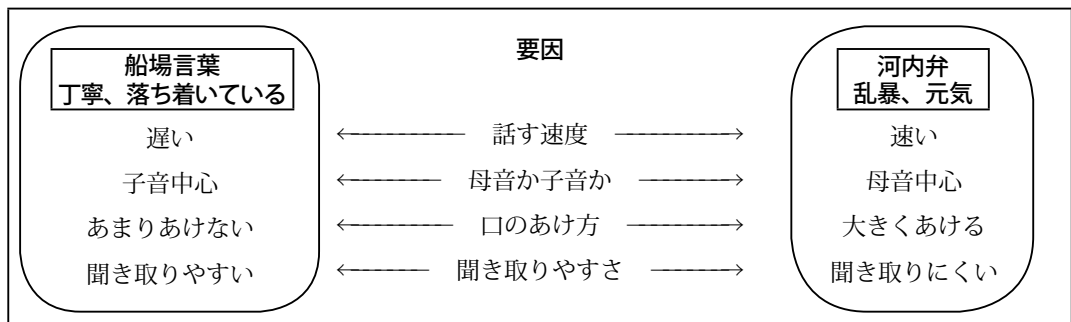


図1 印象と要因

聞き取りやすさが、印象の決め手になっていると考えられる。

5. 結論

細雪の言葉、船場言葉は聞き手に丁寧な印象を与える。その印象を創りだす主な要因は、言葉を省略せずに話すことである。言葉を省略してしまうと、昨今の若者言葉にもみられるように、軽い印象を与えてしまう。聞き手に分かりやすく話すことが落ち着いた印象をつくりだす。ゆっくりと話すこと、言葉の省略をしないことなど、聞き手にわかりやすい話し方をすることで、丁寧な印象を与える。船場言葉の美しい、たおやかな印象は、聞き手に分かりやすい話し方、冠詞や無声音の多用といったことよりうまれる。

悪名の言葉、河内弁は聞き手に元気、乱暴といったイメージを与える。それには、主に口の開け方が関係している。口を大きく開けた状態のまま話すことで、表情がうまれ聞き手は元気なイメージをうけるのだろう。乱暴な印象は濁音が多いことが主な理由であるが、それによる、聞き取りにくさも関係している。

いかに、相手にわかりやすく、聞こえやすく話すかで丁寧な印象になるか、乱暴な印象になるかが決まる。

更に丁寧な印象を話し方で与えたいならば、ゆっくりと言葉を省略せずに話す。また、元気な印象を与えたいならば、口を大きく開けて、少し速く話すと良い。そのように話すことは、発音の仕方や口の開け方にも連動される部分があるため、更に与える印象を強められる。

今後の課題として、聞こえにくい場合の話す速度の計測、話し方などの情報の信頼性がうすいことが、挙げられる。人によって聞こえ方、とらえ方が異なることが、主な原因となっているため、複数の人間で同じように調査し、共通の結果を得られれば、情報の信頼性はあがっていく。よって、更に研究を進めていきければ、グループ研究が必要になってくる。

また、映画『細雪』、映画『悪名』、小説『悪名』はそれぞれ今回調査したもの以外にも、作品が発表されている。時間が限られていたためできなかったが、機会があれば、そちらも研究したい。また、それらの発表年は、今回調査した作品と隔たりがあるため、研究をしていくと、時代ごとの言葉の変化についても調べることができるだろう。

船場言葉、河内弁という素晴らしい大阪弁がこれから先も残り、使用し続けられていくことを願う。

参考文献

- 風間伸次郎（2015）『日本語（話し言葉）は従属部標示型も言語なのか？－映画のシナリオの分析による検証－』国立国語研究所論集
- 今東光（1964）『悪名』新潮文庫
- 篠崎晃一（2012）『例解新国語辞典』三省堂
- 谷崎純一郎（1947）『細雪 上巻』
- 谷崎純一郎（1948）『細雪 中巻』
- 谷崎純一郎（1949）『細雪 下巻』全てほるぷ出版
- 堀井令以知（1995）『大阪ことば辞典』東京堂出版
- 彭飛（1993）『大阪ことばの特徴』和泉書院